

2023.04.30

[ヒーローを待っていても世の中は変わらない1](#)

## [PDF版 「誰のための司法か」](#)

『知事の真贋』の中で片山善博は、「パフォーマンスの上手な知事」に対してやや否定的に（少なくとも慎重に）その実力を見極めるべきことを主張しています。東京の小池知事や大阪の吉村知事などが念頭にあることは明らかでしょう。

しかしながら、2023年春の「統一地方選挙」の結果（日本維新の会の「躍進」）を見る限り、「パフォーマンス上手な知事（党の顔ともいべき吉村知事）」がもたらす影響力は無視できない大きなものがあると感じられます。私たちは、少し落ち着いて現状について考えていくことが必要なのではないのでしょうか。

この問題について考えていく良い材料として、「橋下知事」の時代に湯浅誠が著した『[ヒーローを待っていても世界は変わらない](#)』があります。その時点で湯浅誠が「危惧していた問題」は現在にも当てはまる部分が多いように思われるのです。

以下、複数回にわたって、その内容を紹介します。

Q「ヒーロー」を待望する人々の気持ちと帰結は？

難しいことはよくわからないけど、自分が正当に報われていないという実感は確実なものとしてある。その時「世の中にこういう既得権益があります」と言われると、自分の日々の努力を踏みにじられたような気分になり、日に余裕がない、ゆえになおさらそれを許せなく感じるという状態。

「状況を規定してしまうカリスマ性、反対意見を考慮しない大胆」を持ったヒーローや政党は、よく言えば突破力がある、悪く言えば独善的。私が気になっているのは、なぜこのような人格が待望されるのか、それを待ち望む人たちの心理、それがもたらす帰結だ。

仕事と生活に追いつめられて余裕を失う人たちが増える中。溜まりに溜まったフラストレーションがそのような、切り込み隊長を待ち望むようになるその心理が分かるような気がする。しかし、他方、私はそれが待ち望んでいる人たちに最終的に望ましい帰結をもたらすとはどうしても思えない。

どんな政策でもそれに賛成する人と反対する人は必ず出てくる。政策は基本的に全員を巻き込むもので「巻き込まれる一人ひとりに必死の生活とそこから出てくるニーズがある」以上、それは自然なこと。

Qそのときヒーローはどう振る舞うか？

自分が進めたい事柄については反対する人たちを、「既得権益の為に反対しているだけだ」といい、反対意見を無視し、即断即決で物事を進めていく。それは既得権益に屈しないと表現されるものの同時に、ひとりひとりの必死の生活とそこから出てくるニーズが切り捨てられるという面も持っている。ヒーロー待望論は後者の側面を見えにくくする。

Q 誰も自分自身の必死の生活と、そこから来るニーズは尊重されるべきと思っているが、尊重されるべきものがされていないという不正義があるらしい。なぜだろうか？

自分のことしか考えず、自己利益のために正義を踏みにじる「既得権益」が世の中にあるか

らだ。だから「切り込み隊長」頼むよ、と言うことで、ばっさばっさとやってもらうことが正義にかなうと感じられる。が、複雑な利害関係がある中でばっさばっさとやることで気がついてみたら自分が切られていたということもあり得る。

何しろ今は、生活保護受給者さえ、国会で「既得権益」と言われる時代。最低限度の生活しか保障されていないはずの生活保護が「既得権益」と呼ばれること自体、数年前までは考えられない話だった。

仮に、そのように考える人が増え、例えば（障害のある）兄から雇用先や障害年金が奪われたとすると、その決断をした政治家に対して「強い抵抗にあいながらも既得権益に切り込んだ」と喝采を浴びせる人は居るだろうが、それがどのような結果をもたらすかは、もう少し先まで考えてみる必要がある。

アメリカの批評家ノームチョムスキーは、公民権運動のヒロインだったローザ・パークスについて「ローザ・パークスは傑出した人物だが、私たちにとって重要なのは、第二のローザを探すことではなくローザを生み出した土壌を作ること」だといった趣旨のことを発言し、「魔法のボタンは存在しない」という一文で結んだ。

Q 国会や政党に積極的な意味はあるのか？

周りを見回してみると、今や国会や政党は多くの人にとって嘲笑の対象でしかないことに改めて気づく。しかし、そうやって議会政治はダメだ、政党政治はもうダメと壊して行った時に、それよりマシなものが出てきたことがないというのも歴史的な事実。「壊す時には壊す前にその建物がなぜ建てられたか考えてみよ」、という格言がヨーロッパにある。

十全に機能していないから一気に取り換えてしまおう、バッサリやっ飛ばしてしまおう、という心理には焦りを感じる。それは一つひとつ積み上げながら改善して行くことを待たられないという焦り。その飛躍と焦りに、人類が蓄積した、してきたものに対する冒とくに似た危険性を感じ取ってしまう。

[comment]

「早急に改善したい問題」、「切実な要求・願い」があるにも関わらず、どうにもならないと感じたとき、「強力な leader」が登場して迅速に改革を進めてほしい、という気持ちになりがちですが、それは同時に危険な面を含んでいます。「粘り強く意思表示する」、「情報も集めながら時間をかけて話し合い、合意を形成していく」という面倒な過程が「民主主義の営み」なのですが、その面倒くささを引き受けていけるような「時間と空間」をどのように生み出し保障するのか。湯浅誠とともに、それを考えていく必要があると思います。が、湯浅はまず、「とても待たられないというあせり」の背景には何があるのか考察します。

続きは「焦りの背後にある格差貧困問題」

**2023.05.06**

ヒーローを待っていても世の中は変わらない2

この間の主な記事の PDF 版

表記書籍の中で湯浅誠は「ヒーローを待ち望む心理」の危険性と同時に、現状を改善したいという「活動的な市民が持つ焦り」の問題点を、体験に基づいて指摘します。ウクライナ戦争が続いている今、当時と共通する点と異なる問題があるわけですが、「現実と向き合う向き合い方」について示唆に富んでいるように思います。

[以下、内容紹介の続き]

「強いリーダーシップ」をもったヒーローを待ち待ち望む心理は、「極めて面倒で、疲れる民主主義というシステム」を、私たちが引き受けきれなくなっている証ではないか。

Q その心理の問題点は？

A1 「気づいたら自分がバツサリ切られていた」という形で、私たち自身の、ひいては社会の利益に反すること。

A2 多くの人が大切にしたいと思っている民主主義の空洞化、形骸化の表れであり、またそれを進めてしまうという点。両者を結びつけているものが格差貧困問題の深まり。

Q 「溜め」のない社会とは？

そもそも論として、仕事と生活に追われて疲れている人は、こんな本を読む暇も気力もでてこない。かつて私はそのことを「溜め」という言葉を使って表現した。

少なからぬ人たちの「溜め」を奪い続ける社会は、自身の溜めをも失った社会である。アルバイトや派遣社員を「気楽でいいよな」と蔑視する正社員は、厳しく成果を問われ、長時間労働を強いられている。正社員を「既得権益の上にあぐらをかいている」と非難する非正規社員は、低賃金不安定労働を強いられている。人員配置に余裕のない福祉事務所職員や、お金に余裕のない生活保護受給者が、お互いを税金泥棒と非難し合う。

膨大な報告書類作成を重ねて目配りの余裕を失った学校教師が、子どものいじめを見逃す。財政難だからと弱者切り捨てを進めてきた政府が主権者の支持を失う。これらすべて、組織や社会自体に溜めが失われていることの帰結であり、組織の貧困、社会の貧困の現われに他ならない。

### 『反貧困』より

溜めのない人が増えていくことで「さっさと決めてくれ。ただし、自分の思いどおりに」と強いリーダーシップを発揮するヒーローを待ち望む心理が高まっていく。格差貧困問題の広がりや民主主義の空洞化・形骸化は、このような現象として、私の中で不可分な形で結びついている。

Q この本を書くきっかけとなった体験は？

ホームレスの問題から始める中で、貧困問題に気づき、そこでもがく中で民主主義の問題に思い至った。渋谷でホームレス支援をやっていたのが「もやい」という団体を作って生活相談を受け始めてみると、若い非正規労働者などアパートのある人が相談に来るようになり、単なるホームレス問題ではくくれなくなった。「貧困問題」という言葉に行き着いたのが、2006年のこと。

そして、2007年に「反貧困ネットワーク」という活動をはじめ、2008年に「派遣村」を開催。その後、2009年に内閣府参与として政権に入り、格差貧困問題の改善をめざして働いた。生活就労一体型支援や、対象を限定しない電話相談の実施などやれたこともたくさんあったが、課題も多くあり壁にぶつかった。では、その壁って一体何なのか、と考えたら民主主義の問題に突き当たった。

Qどのような問題か？

民間の活動と行政の公的な政策づくりは質的に違う。仲間うちで自主的に行う民間の活動の手法だけでは実際には政策は進まない。

生活に困った人の相談を受ける生活支援の現場は狭い世界。いつもそうした状態に追い込まれた人たちとつきあうので、その現実については詳しくなっていくが、それに携わっていない人たちとの交流・意見交換の場は少ない。仲間内では前提とされるものがどんどん増えていって、言わなくても分かる雰囲気を作られていく。

Qそれ以外の人たちと接することでぶつかった困難は？

当たり前と思っていた前提が外の人たちには全然通じない場合がある。狭い世界の仲間内で、たくさんのことを共有した頭で外の世界に働きかけても、なかなか外の人たちに通じる言葉が見つからず、空回りしてしまう。

えてして「外の世界は無理解だ、ひどい」となるが、原因はこちら側にあることも少なくない。自分たちが前提としているものを共有していない人たちと話し合うための言葉を見つけられないという問題。いわゆる「蝸壺化」、「ガラパゴス化」の問題。

私は出演したテレビ番組でそうした場面にしばしば出くわした。大抵討論形式だったから、私の反対側には、私と相いれない意見を持っている方が座る。その方たちは極めて真剣に私と真っ向から反対する意見を述べてこられる。反論を試みても、私は何度も「この人は人生何10年を生きてきて、その実感からこうした意見に達しているという重みと、その意見の堅さ」を感じた。

自分の言いたいことを言うだけでは、決してこの人たちには通じない。また、私にはいつもこうした人たちの方が世の中では多数派なんだろう、という感覚もあった。自分の方が少数派だとすれば、その人たちを「わからず屋め！」と切り捨てても何も変わらない。

Q 国の政策に直接関わって痛感したことは？

上記のような体験の延長線上にあることだった。

民間の「濃く、だけど狭く」と行政の「広くだけど、薄く」は対照的であり、またどちらにも一長一短があり、一概にどちらが優れているとはいえない。

政府の「やる気」や「意欲」の問題にするのは、安直で見せかけの回答に過ぎない。それはちょうど生活に苦しんでいる人たちの苦しみを、やる気や意欲の問題にして、やらないのは本人にやる気がないからと言っているのと同じ。

大切なのはやるための条件をいかに整えるか。誰が整えるのかと言えば、言うまでもなく私たちだ。なぜなら、私たちが主権者だから。ここで誰が調整責任を負うべきなのかという問題と絡んで、民主主義の問題が出てくる。

世の中の九割の人が反対していることを、いくら私たちがやるべきだと言っても、そう主張する人が一割しかいなければ、一割の側につく政治家はほとんどいない。当然、九割を取る。そうでないと次の選挙に受からないし、そこで一割を取るような人は、そもそも議員に当選していない。（やるべきではないというのが「民意」）。それを「けしからん」「やらない政治が悪い」と言ったところで、一対九の構造を変えられなかったら、政治家は九を取り続ける。

それを二対八、三対七、四対六に変えて行くのが、主権者である私たち（主権者として譲れない意見を持っている私たち）のやるべき事で「やらない政治が悪い」、ですますのはほとんど「俺の言うことを聞かないお前はけしからん」と言っているのと同じだ。

2023.05.19

[ヒーローを待っていても世の中は変わらない 3](#)

[この間の主な記事の PDF 版](#)

[ヒーローを待っていても世の中は変わらない 2](#) の続きです。

表記書籍の中で湯浅誠は、「自身の体験」などを豊富に例示しながら、民主主義にとって大切なことは何かを私たちに投げかけ、「深刻な事態を誰かに何とかしてほしい」という焦りに向き合いながら「民主主義の面倒くささ」を引き受けるしかない、ということを訴えます。これを読むことで、私自身が「自らの焦り」と向き合う機会になったのですが、皆さんはいかがでしょう。ぜひ、私の要約・紹介ではなく「そのもの」を読んできたいと思います。

Q 最善を求めつつ最悪を回避するとは？

一、ともすれば「取るに足りない問題」、と片付けられがちなこの課題を、実態に見合った大きさと理解してもらい、向き合ってもらうために。より多くの人たちに、働きかけていく

こと。一対九を二対八、三対七、に転換していくこと。

二、当面たとえ一対九だとしても一割分、あわよくば二割分、二対八だとしても、可能なら三割分というように、現実の調整過程にコミットして、一步でも半歩でも実態に迫っていくように政策を実現させていくこと。

三、八割、九割の世論をバックに「望ましくないと感じられる政策が進もうとしている時」に「政府が悪いことをしている」で済まさないこと。その八割・九割の世論に働きかけるとともに、それが容易に変わらない時には一割でも二割でも、自分たちの意見を残すように調整過程にコミットすること。

**最悪を回避するために、わずかでも自分たちの主張を滑り込ませるイメージ。**自分と異なる意見を持っている人のほうがはるかに多いと言うことを前提に、最善を求めつつ同じくらいの熱心さで最悪を回避する努力をすることが必要。

Q 民間の活動が持つ傾向と問題は？

同じような意見を持つ百人の仲間を二百人に増やすというように、内側から広げる志向を持つ。自分たちと近いところに居る人達を強く意識し、仲間に迎え入れることに努める。自分の考えを変える必要はないので、発想がどうしても内向きになりがち。

Q 公的にやる時の困難は？

反対意見を無視できないわけだから、それとの綱引きの結果次第では自分にとって**最悪の結論**にもなり得ることを常に想定しないといけない。その場合は一番遠くにいる人たちを意識し、その人達の強硬な反対が少しでも和らぐよう外側の理屈との橋渡しに心を砕くことになる。

Q そのような努力を放棄したら？

仮に百人が二百人になったとしても、それが一億二千万分の二百であれば、やはり政策は動かないし、逆ベクトルの政策がとられる可能性も高い。最善を求めつつ最悪を回避するというのは、近くから広げ遠くと橋渡しをするということ。

これは本当に難しい。ともすると、いうことが分裂する。しかし、その困難さと真剣に向き合えなければ、物事は進んでいかないだろう。

単にお金がなくて仕事と生活に追われているというだけでなく、多少のお金があっても、効率的に生きることに精一杯で、**物理的にか精神的にかまたその両方かで時間がない**。社会に「溜め」がないとはそういうことで、**格差貧困が広がる社会は底辺の人たちだけでなく、「勝ち組」と言われる人たちからも余裕を奪っていく**。

単純に言って、朝から晩まで働いてへとへとになって、9時10時に帰ってきて、翌朝7時にはまた出勤しなければならない人には「社会保障と税のあり方」について一つひとつの政策課題に分け入って細かく吟味する気持ちと時間がない。

子育てと親の介護をしながらパートで働いて、クタクタになって一日の家事を終えた人には、それから「日中関係の今後の展望」について、日本政治と中国政治を勉強しながら、かつ日中関係の歴史的経緯を紐解きながら、一つひとつの外交テーマを検討する気持ちと時間はない。

だから私は最近こう考えるようになった。「民主主義」とは高尚な理念の問題というよりも、むしろ物理的な問題であり、その深まり具合は時間と空間をそのためにどれくらい確保できるか、という極めて即物的な事に比例するのではないか。

## Q 時間と空間が参加可能にするとは？

時間と空間の問題は、言い換えれば参加の問題。世界的政治的参加のための空間がなければ、そもそも参加が成り立たないし「場」空間があっても時間が無ければやはり参加できない。

例えば、誰かがデモ行進を申請しなければ、デモ行進を行う空間は確保されない。そして、そこに意味を見出して時間を切り出してくれる人たちがいなければ、主催者だけの寂しいデモ行進になる。

多くの人たちが「決めてくれ、ただし、自分の思いどおりに」、と個人的願望の代行を、水戸黄門型ヒーローに求めるのではなく「自分たちで決める。そのために、自分たちで意見調整する」と調整コストを引き受ける。民主主義に転換して行くためには、さまざまな人たちと意見交換するための社会参加、政治参加が必要。そして時間と空間はそのためのもっとも基礎的・物理的条件になる。

(…)

従来の「血縁、地縁、社縁」も活用しながら、かつそれだけに閉じこもることなく、他との交流を多様に進めていくこと、その時に必要になるのが「人と人とを結びつける工夫と仕掛け」で、それが異なる文化、異なる作法を持つ者同士の信頼関係づくりを可能にする。

だから「誰が決めてくれよ、ただし自分の思いどおりに」という人を見たら、ヒーローを求める気持ちの奥にある「焦りや苛立ち」にこそ寄り添い、それに向きあって一緒に解決して行くことこそ自分へのチャレンジだと感じるようになる。「誰の責任だ」と目を血走らせることより、課題を自分のものとして引き受け、自分にできることを考えるようになる。

「決められる」とか「決められない」とかではなく、「自分たちで決める」のが常識になる。そのとき、議会政治と政党政治、民主主義の危機は回避され、「切り込み隊長」としてのヒーローを待ち望んだ歴史は過去のものとなる。「ヒーローを待っていても世界は変わらない。誰かを悪者に仕立て上げるだけでは世界が良くならない。」

ヒーローは私たち。なぜなら私たちが主権者だから。私たちにできることはたくさんあります。それをやろう。その積み重ねだけが社会を豊かにする。